CAP2018 社会の文脈が指し示す天文活動の方向性

～人はなぜ星を美しいと感じるのか？～

縣　秀彦（CAP2018 大会事務局長／国立天文台）

1. はじめに

CAP は、国際天文学連合（IAU）が主催する国際会議です。2005 年からほぼ 2 年置きに実施されており、今回が 7 回目になります。国立天文台と福岡市は、一昨年、開催地として立候補し、他の多数の立候補都市を退け開催地に選ばれました。私が日本での開催を強く希望したのには、次の理由からです。

2. 前回大会　コロンビア・メデジンにて

前回の CAP はコロンビアのメデジン市にて 2016 年 5 月に開催。日本人にとって馴染の無いこの街を、2013 年、ウォールストリート・ジャーナルは「最も革新的な都市」1 位に選んでいました。現地を訪れて分かったことは、街づくりの中心が、美術や音楽、スポーツと並んで、科学であり、天文学であったということです。街の象徴である科学館とプラネタリウム館を街の人たちが誇りに想い、大切にしていることが容易に理解出来ました。

コロンビアでは大きな政治改革が行われ、それまでの治安の悪さや国内の対立を乗り越えてきました。2012 年には、メデジンに近代的なプラネタリウム館が完成。CAP 大会事務局長でかつプラネタリウム館長のカルロス・モリーナ氏が、興味深いエピソードを私に話してくれました。

15 歳ぐらいのギャング団の若者たちが、プラネタリウムにやってきました。普段は、学校にも行かずグループ抗争に明け暮れている心のすさんだ若者たちのようです。そのリーダーがプラネタリウム番組を見終わって、ドームから出てきてこう言ったそうです。「俺たちはいつも狭いテリトリー争いを繰り返しているけど、間違っていた。地球全体が俺たち人間にとってのテリトリーなんだ。武器を捨てよう」それから抗争は収まり、若者たちは学校に通い始めたそうです。

そもそも、貧しいことがすべての元凶にあり、科学技術が豊かさをもたらしてくれることを発展途上国の人々の多くが強く信じています。しかし、コロンビア・メデジン市の科学館とプラネタリウム館で実施された CAP2016 では、科学技術による物質的な豊かさのみならず、天文学は心の豊かさを私たちにもたらしてくれることや天文学が平和に寄与できることを教えてくれました。

3. 社会の文脈としての天文

翻って我が国ではいかがでしょうか？　天文文化はマイナー文化であり、世間一般では星や宇宙への関心は個人の文脈、すなわち趣味や知的興味の対象として認識されることが多いかと思います。しかし、なぜ、日本ではお月見や七夕など古くから星を愛でる風習があるのか？　アニメ・映画、歌謡曲などで星や宇宙に関連するテーマがなぜ好まれるのか？　また、今日の日本における天文学や宇宙科学の発展（例えば、IAU の会員数は世界第 3 位）はなぜか？　なぜ、日本には特出した数の公開天文台やプラネタリウム館があるのか？等々、決して個人の文脈のみならず社会全体（産業、文化、教育、学術ほか）の文脈で世間一般が意識することが重要な時期を迎えているようにも感じます。

一方、天文学は、さまざまな科学領域の中でも、もっとも科学コミュニケーションが盛んな分野と言われています。しかし、国際的

には状況はどうなのでしょうか？　天文教育普及研究会に集う私たちの多様な実践や取り組みは世界の仲間からどう評価されるのでしょうか？これらが CAP を日本で開催しようと思い立った理由です。そして、IAU の皆様、スポンサー・協力者の皆様、LOC（チーム福岡＋チーム NAOJ）全員のチームワークによって CAP2018 in 福岡大会を無事終了することが出来ました。多くの方々にここで深く感謝の意を示したいと思います。

4. 史上最大の CAP 国際会議に

2018 年 3 月 24～28 日に、世界各国 53 か国から 446 名が福岡市に集いました。

昨年 10 月までの発表申込には、423 件の申込がありました。審査では不採択は極力避け、ポスター発表に回ってもらうようにしました。しかし、旅費の支援が得られないと来日出来ない人も多く、最終的には 305 件（口頭 170 件、ワークショップ 20 件、ポスター発表 111 件）でした。参加者数、参加国数、発表数ともに過去の大会を凌駕する大会となりました（前回のメデジン大会は、約 30 カ国から 140 名参加。発表数 147 件）。

今回は日本からの参加者も 198 名（前回までは多くて 10 名前後）。海外の先進的な取り組みを知り、海外とつながっていく機会となったばかりか、日本における多様な取り組みを知っていただき、情報や人脈を持ち帰っていただく貴重な機会ともなりました。

しかし、日程や会場キャパシティーにより参加できなかった本会会員の皆さんがいらっしゃいます。LOC は 8 月には英文の集録誌を発行し、その PDF 版は無料で誰でも閲覧可能にしますが、本誌「天文教育」でも特集を編纂していただけることになりました。編集担当の矢治、鴈野、縣の 3 名で、会員に有益な発表等を僭越ながら選ばせていただきました。

5. 花には花の文脈・人には人の文脈が

なぜ、今回の CAP に多くの人が集まったのでしょうか？　5 日間の会場の熱気、昂揚感は偶然 or 必然？　最終日に福岡市は桜が満開を迎えました。私は福岡城址を散策しながら考えました。「なぜ、桜の花はこんなにも美しく、毎年咲くのだろうか？」桜の花には花を咲かす理由と目的があります。

一方、53 か国から集まった参加者にも、CAP に参加した文脈があります。そして、参加者全員にとっての共通の目的もありました。大会テーマ「今日の世界で天文学を伝える目的と方法」の検討です。混迷を深める国際情勢の中で、多くの人は、希望や夢を描けずにいます。そもそも天文学者のための組織であった IAU が、発展のための天文学、社会における社会のための天文学、そして、平和のための天文学を志向するようになりつつあります。今回の会議では、天文学の発展や社会への浸透によって、天文学そのものが世界平和につながれば、または社会の健全な発展につながればと考え実践し発表した人が数多くいました。

世界平和は過去から学ぶこともありますが、それだけでは不確実で、未来を見据えることが重要です。天文学はもっとも大きなフレームで将来を見通すことができます。そういう大きな枠で考える視座を与えてくれるツールであり、かつ、天文学とは、世界平和や個人の幸福に関して、現状に対して問題提起ができる学問なのです。今回の会議によって、世界各地からの多様な参加者が、情報、スキル、ミッション、そして何よりも友情を身に付け、自国に持ち帰りました。本会議が目指した呼びかけ、すなわち、天文学は今日の社会をより良くすることに寄与できること。それを実現すること、一歩でも前に進むことが私たちの責任でもありましょう。

縣　秀彦